

国際経済と生活

今 静行

ビジネスシリーズ 7

亜紀書房

今
靜
行

國際經濟と生活

亞紀書房

著者紹介

1926年北海道生まれ。1950年中央大学法学部卒，1952年同大学経済学部卒。
同年，北海タイムス入社，政経部長，論説委員，米・ソ特派員，東京編集長
を歴任。1972年退社，経済評論活動に入る。

現在：経済評論家，コン経済生活研究所所長，日本消費経済学会会員。

著書：『経済がわかる本』（ダイヤモンド社）

『続・経済がわかる本』（ ）

『経済数字に強くなる本』（実業之日本社）

『株式用語辞典』（共著，ダイヤモンド社）

1980年8月25日 第1版第1刷発行

定価 1200円

国際経済と生活

著者 ^{こん}今 ^{せい}静 ^{こう}行

発行所 株式会社 亜紀書房

東京都千代田区神田神保町2-9

電話 03-264-8301 (代)

振替 東京 0-144037番

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

新灯印刷・太洋社製本

0033-1011-0098

まえがき

複雑にいりくんでいるものを解きはぐして単純化する——この能力の有る無しがもたらす影響はまことに大きい。ときには、一国の政治や経済の、企業経営の、家計の将来を左右するほどの意味をもつ。

私たちの周辺で、国際経済の重要性はよくわかっているつもりだが、範囲が広すぎてなにかから手をつけたらいいのかわからない、とか、国際経済は用語が難しくてなかなか先へすすめないということばをしばしば耳にする。

しかし毎日の生活は、容赦なく海外の影響をうけている。国際経済下で日本経済は動いており、あいつぐ原油の値上げ、食料価格の値動き、為替相場の変動などは、企業経営はいうまでもなく台所にまで直結している。だから好むと好まざるとにかかわらず、私たちのいまの生活をしり、これからの生活を考えていくには国際経済を学ばないわけにはいかない。

この本は、枝葉をとりはらって、国際経済のベーシックな骨ぐみを解明したものである。

まず、戦後経済の発展をもたらした新資本主義の来源をアメリカのニューディール経済に求め、ついで七〇年代の大暴風のなかで跳躍し、あらたな先進国間関係をつくりだしたことの画期的意義を明らかにした。すなわち、一九三〇年代世界大恐慌と、七〇年代の二つのショック（ニクソン・ショックと石油ショック）という緊急事態に対応して、資本主義がどのようにその体制を変えていったかを考えてみた。

このような基本認識に立つて、世界が直面しているいくつかの重要課題を、経済の眼で解きほぐそうと試みた。ホットな政治の争いをみるさいも、多彩な現象に幻惑されずにその本質をつかまえねばならないのである。

日本もかつてやってきたように、外交はアメリカに従っていけばよいというわけにはいかなかった。日本の戦略が各国から問われており、われわれもまたそれに答えなければならない。世界の経済構造を理解できれば、日本の進路もおのずとはっきりしてくる。これからは先進国間の友好と環太平洋圏の友好という二本の柱が必要なのである。

国際協調経済のもとで日本経済がどのように変ったか、また、どんな問題を解決していかなければならないのか。不透明、不確実といわれている八〇年代の展望について、逆に確定的な要因（四つの確実）をあげて考えてみることにした。財政ひとつをとってみてもいまはまだ減速経済

を定着させる調整過程にあるが、この過程で経済の活力を減殺してしまわないため、政策の重点をどこにおくべきかについて、私なりの主張を述べておいた。

気負いは大きくてもなにごん力不足で、当然のことながら荒削りである。読者のご叱正をお願いしたい。

国際政治経済の激浪に奔弄^{ほんろう}されやすい日本国民にとって、つぎつぎとびこんでくる大ニュースを正しく理解するのにこの本がいくらかお役にたつことがあれば幸いである。

なお、巻末にある「私の取材メモから」は、私の所属する日本記者クラブにおける記者会見のなかから、とくに関連する部分を整理・排列したものである。

本書の執筆にあたって、亜紀書房聚田金治氏の真摯な姿勢と協力に負うところが多かった。本書の展開、資料蒐集分析などに意欲的に作業され、実質的共著といえる。聚田氏に心からお礼を申しあげます。

一九八〇年八月一日

今 静行

国際経済と生活／目次

はしがき i

序章 経済の眼で世界をみる…………… 3

資源の均衡と政治の均衡 3

アメリカはほんとうに弱いのか 5

米・ソはお互いを必要としている 8

東西をつなぐ貿易・資金の網の目 11

I 戦後経済のしくみ——新資本主義の誕生…………… 13

平和な環境と経済 13

原因不確実の大恐慌 16

ふしぎな決定的瞬間 20

ソ連の「第三期論」のあやまり 25

中産層の解体と没落 28

対外膨張・戦争経済化の日・独の道 30

恐慌のない経済体制への模索 32

管理通貨と財政・金融の機能 35

経済復興の大胆な政策 37

民主化により経済再建をはかる 39

戦後経済の原型となったニューディール 40

たち遅れた貿易自由化 44

超国家的世界経済機構の構想と運営 45

国際管理通貨をつくれるか 48

II 国際協調経済とはなにか……………53

八〇年代は不透明か 53

大暴風の七〇年代 55

七〇年代ふたつの大暴風 57

高度成長を可能にした固定相場制 58

ドルの動揺と過剰ドル 60

変動相場制とサミット体制 64

III

石油ショックの経済学……………109

- | | |
|----------------------|-----|
| 金暴騰と国際インフレーション | 67 |
| 変動相場制と日本の企業結合 | 71 |
| 世界経済と貿易の見取り図 | 76 |
| 直接投資—人質の相互交換 | 85 |
| 資本過剰グループと資本不足グループの矛盾 | 93 |
| 先進的役割をはたしているEC | 95 |
| 環太平洋経済圏の重い意味 | 98 |
| 新しい経済結合体ができる可能性 | 105 |
| 油に弱い日本経済 | 109 |
| サミット、OPECに反撃 | 111 |
| 石油増量のない経済成長へ | 113 |
| 市場を反映しない値上げ理由 | 119 |
| 値上げのバランスシート | 122 |

IV

日本経済・四つの確実……………143

石油ない日に備えるOPEC	125
石油値上げのブーメラン作用	130
余剰石油代金はどこへいくか	134
先進国と産油国の支えあう関係	140
日本経済の到達点を忘れるな	143
海外依存の確実性	147
日本経済はなぜ高度成長できたか	152
減速経済の確実性	157
日本経済の劇的变化	159
景気の牽引車がかわった	163
減速になる三つの要因	167
税金・社会保険料が高くなる確実性	172
財政のあり方国際比較	178

人生七五年と栄養論 181

人口ピラミッド変型の経済問題 183

急増していく社会保障負担 186

経済政策の老人化をおそれる 189

V 企業経営・物価・家計の特徴……………191

国際協調経済にみあって企業経営・家計 191

バランスシートの国際比較 192

損益計算書比較での特徴 196

高水準の労働生産性 201

日本は物価の優等生か 204

とびぬけて高い貯蓄性向 208

個人借入れが急成長 213

終章 これからの日本・これからの生活……………217

戦後発展におけるアメリカの役割 217

「昭和恐慌」の貴重な教訓 219

国際経済時代・五つの課題 221

私生活・三つの心がまえ 226

私の取材メモから……………231

J・ケネス・ガルブレイス教授

鄧小平中国副首相

エズラ・F・ヴォーゲル教授

故大平正芳首相

A・Wクローセン アメリカ銀行頭取

クラニンIOC会長

ガーセム・サーレフホ駐日イラン大使

ドミートリー・S・ボリヤンスキーソ連大使

アペル西ドイツ国防相

アリストイデス・ロヨ パナマ共和国大統領

国際経済と生活

序章 經濟の眼で世界をみる

資源の均衡と政治の均衡

「もし乗用車、航空機など工業製品の輸出で稼げなくなるときがきたと仮定したばあい、アメリカはなんで食っていくのかね」

という質問にたいして、アメリカの著名な經濟ジャーナリストは胸を張って答えた。

「当分は、コンピュータで食っていくことになるうが、そのあとは農産物サ。半永久的にね」この会話は、世界最大の農業国であるアメリカの決定的な強味を端的に表現しているが、興味と関心はこのあとにある。

「どこが一番のお得意先かね」

「それはソ連サ」

アメリカの対ソ穀物禁輸が断行されたいまでも、この会話には眞実性がある。

世界の双壁米ソのにらみあいはずづいてゐるが、あい拮抗してゐる軍事力は別として、いま主要物資四〇品目の生産量を取りあげて比較してみると（日銀・国際比較統計による）、金メダルにあたる第一位の数は、アメリカ一五にたいしてソ連の一四と文字どおり伯仲してゐる。ちょうどオリンピックの金メダル獲得数とおなじように米ソ両国が圧倒的に多い。

アメリカ——銅鉱、鉛鉱、石炭、電力、粗銅、アルミニウム、合成繊維、パルプ、合成ゴム、窒素肥料、硫酸、ガソリン、乗用車、大豆、肉類

ソ連——石油、棉花、原木、銑鉄、粗綱、銑鉄合金属、亜鉛、アセテートレーヨン、毛糸、綿糸、セメント、馬鈴薯、小麦、大麦

参考までに日本をみると、金メダル四で、テレビ、商業車、船舶、魚介であり、銀メダル（第二位）八、銅メダル（第三位）八、までいれると日本は世界のビッグスリーにはいる経済大国であることがわかる。ヨーロッパ先進国には金メダルはない。

私たちは、政治や軍事という現象面に眼をうばわれやすいが、現象の底にある経済をしっかりとみえることが大切である。米・ソがにらみあえるのは、このようにみごとといえるほどの資源の均衡があるからである。